

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 10日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23830089

 研究課題名（和文） ボーダーライン周辺群における見捨てられスキーマとボーダーラインの
徴候との関連

 研究課題名（英文） The relationships between the abandonment schemas and borderline
personality features of Individuals with the Borderline Personality Features.

研究代表者

井合 真海子 (IGO MAMIKO)

早稲田大学・人間科学学術院・助手

研究者番号：40613865

研究成果の概要（和文）：本研究では、境界性パーソナリティ障害(borderline personality disorder: BPD)傾向者を対象に、「見捨てられスキーマ（見捨てられることに関する考え方の枠組み）」の変容を促す2ヶ月の長期的介入実験を行った。

介入実験の結果、見捨てられスキーマの変容を焦点とした群では、スキーマをターゲットとしないCBT (Cognitive Behavior Therapy) 群およびWL (Waiting-List) 群よりも有意に見捨てられスキーマ得点とBPDに特徴的な行動（不安定な対人関係、衝動的な行動など）得点が減少した。よって、見捨てられスキーマの変容を促す介入は、BPDの徴候の改善に効果があることが示された。

研究成果の概要（英文）：In this study, an experiment consisting of a long-term intervention performed over a 2-month period, which had been designed to modify “the abandonment schemas” (frame of reference for abandonment) was conducted with individuals with borderline personality features.

The results showed that the scores on the abandonment schema scale and the scale of behavior characteristics of BPD (unstable relationships, impulsive behavior, etc.) reduced significantly in the group focused on the modification of the abandonment schemas compared to the CBT group and the waiting-list group. This suggested that an intervention focused on the modification of the abandonment schemas is effective for improving borderline personality features.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	700000	210000	910000
2012年度	500000	150000	650000
年度			
年度			
年度			
総計	1200000	360000	1560000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：境界性パーソナリティ障害、見捨てられスキーマ

1. 研究開始当初の背景

BPDは、パーソナリティ障害の一つとして位置付けられる障害であり、感情の不安定性、空虚感、対人関係の不安定さ等が特徴として挙げられている(DSM-IV-TR, 2002)。このBPDの症状の一つとして、BPD研究初期より、見捨てられ不安の強さが指摘されている(e.g., ガンダーソン, 1988)。近年BPDの治療において有効性が示されている認知行動療法的介入では、BPDの特徴であるスキーマ(一貫した認知的な枠組み)の一つとして、見捨てられ不安と深く関連する「見捨てられスキーマ」が治療対象とされている。BPD臨床群を対象にスキーマ変容を目的とした研究としては、代表的なものでSchema Therapy: ST(Young, 1999)に関するものがある。Young(e.g., 1990;1999)は、パーソナリティ障害への有効な治療法として、認知的技法・行動的技法といった認知行動理論的アプローチを取り入れた、スキーマ療法(Schema Therapy: ST)を提唱したが、その治療の標的であるスキーマ群を、人生早期に形成される「早期不適応スキーマ」と命名している。そして、その一つとして、「見捨てられ/不安定スキーマ」を挙げている。このスキーマはBPDに特徴的なスキーマの一つとされており、Nordahl, Holthe, & Haugum(2005)は、BPD患者は他のパーソナリティ障害の患者よりも、「見捨てられ感/不安定スキーマ」の得点が有意に高かったと報告している。また、BPD臨床群を対象としたSTの有効性について実証的に検討した研究もいくつか見られる(e.g., Nadort, Arntz, Smit, Giesen-Bloo, Eikelenboom, Asselt, Wensing, & Dyck, 2009)。

このように海外においては、スキーマをターゲットとした実証的な研究がいくつか見られるが、本邦においては未だ見られないのが現状である。また、これらは見捨てられスキーマだけでなく他のBPDに特徴的なスキーマも治療のターゲットとしているため、見捨てられスキーマのみに介入した場合の効果性については検討されていない。

さらに、BPD臨床群ほど重篤ではないが、BPDの特徴を有するBPD周辺群についても、見捨てられスキーマ得点が高いことが明らかとなっている(井合ら, 2007)。しかしながら、BPD周辺群を対象として、見捨てられスキーマを介入のターゲットとした実証研究は本邦においては未だ見られない。

2. 研究の目的

本研究では、大学生のBPD周辺群を対象に見捨てられスキーマに対して介入を行うことで、実際にBPDの徴候が改善するかどうかについて、2ヶ月の長期的介入実験によって検討することを目的とした。

本研究では、見捨てられスキーマを標的とした介入を行う実験群、標準的な認知行動療法を行うCognitive Behavior Therapy(CBT)群、実験期間は何も介入を行わないWaiting List(WL)群の3群を設けて、効果を比較する無作為割り付け研究を行った。

3. 研究の方法

本研究は、スクリーニング調査、実験の説明(インフォームドコンセント)、3回の実験室来室、日常生活での8週間の介入、2回のフォローアップ調査により構成された。

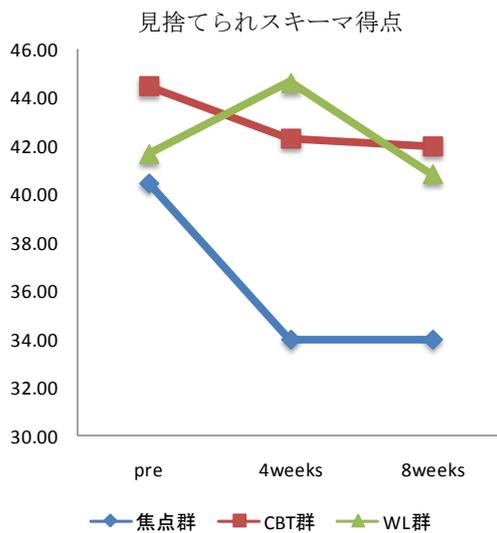
(1) スクリーニング調査：授業終了後の学生が集まっている場を利用し、スクリーニング調査を行った。実験参加の希望があった者の中で、見捨てられスキーマの合計得点が平均点以上で、BPDの徴候を測るPDQ-Rの得点が平均点以上の者に、実験参加の依頼を行った。

(2) 介入実験：実験実施前に実験の趣旨を説明し、同意を得られた者を実験参加者とした。実験参加者はそれぞれ実験群とCBT群、WL群にランダムに割り振られた。最終的な実験参加人数は実験群6名、CBT群6名、WL群6名であった。実験参加者は、1回目の実験室来室において、ベースラインの測定として、見捨てられスキーマ、BPD傾向等に関するアンケートへの回答を求めた。次に、「見捨てられた」と感じるような場面をひとつイメージしてもらい、実験参加者の皮膚電位、気分、感情、行動の予測について、質問紙において尋ねた。その後、実験群については、見捨てられスキーマに関する心理教育、ホームワークの説明を行い、8週間のホームワークを課した。CBT群については、認知行動-感情のメカニズムに関する心理教育を行い、標準的なCBTで用いられる思考記録表をホームワークとした。WL群については、心理教育・ホームワーク等は一切行わなかった。実験開始から2週間毎に実験室に来室してもらい、見捨てられスキーマ、BPD傾向、気分状態等について質問紙で回答を求めた。さらに、実験開始から約8週間後に、再び実験参加者に実験室に来室してもらい、1回目と同様の手続きを行った。実験群・CBT

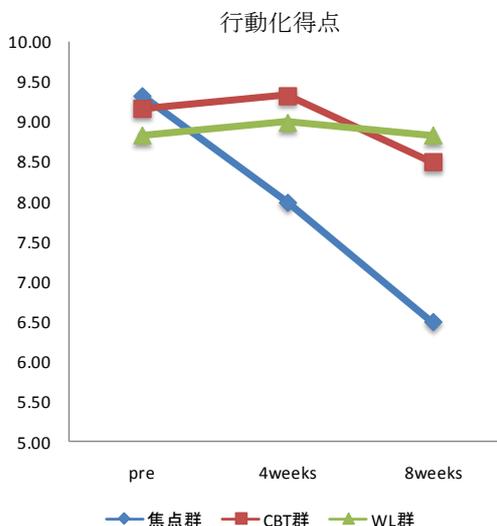
群に関しては、8週間の介入実験の感想などを尋ねるインタビューを行った。

4. 研究成果

2 要因（混合計画）の分散分析を行った結果、交互作用が有意傾向であった ($F(2,15)=2.77, p<.10$)。見捨てられスキーマ焦点群は、CBT 群および WL 群よりも、有意に見捨てられスキーマの得点が減少していた ($p<.05, p<.10$)。



また、BPD の特徴の一つである、対人関係のスキルに関しても、交互作用が有意であった ($F(2,15)=4.52, p<.01$)。見捨てられスキーマ群は、WL 群と比較して得点の増加が優位傾向を示した ($p<.10$)。さらに、BPD に特徴的な行動化得点について交互作用が有意傾向であり ($F(2,15)=2.90, p<.10$)、見捨てられスキーマ焦点群は、WL 群と比較して有意傾向で得点が減少した ($p<.10$)。一方、皮膚電位の値、BPD 傾向全体を測定する得点については、3 群ともに有意な差は示されなかった。



以上の結果から、見捨てられスキーマをターゲットとする本研究の介入が、見捨てられスキーマの変容に効果的であり、さらに BPD に特徴的な行動化や対人関係スキルの改善について効果があることが示された。本研究の結果から、BPD の徴候の改善のために見捨てられスキーマをターゲットとする重要性が示された。また、近年欧米で注目されている BPD に対するスキーマを標的としたアプローチの効果が、本邦において実証されるという点で、本研究の結果は意義深いといえる。今後は、データの蓄積をするとともに、BPD の徴候の行動化以外の側面（感情のコントロール等）により働きかけられるようなプログラムの改良が必要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

井合真海子、根建金男 見捨てられ場面における見捨てられスキーマと思考・感情・行動との関連、行動医学研究、査読有、第 39 巻 2 号、2013（印刷中）

〔学会発表〕（計 2 件）

Igo, M. & Nedate, K. The relationships between the abandonment schemas and coping styles of individuals with the borderline personality features in abandonment situations. 2012, 査読有, Proceedings of the 42nd Annual Congress of European Association for Behavioral and Cognitive Therapies, 254.

井合真海子、日本における BPD 基礎研究の課題と提案、ワークショップ「日本における境界性パーソナリティ障害研究と治療実践の試み」(井合真海子・遊佐安一郎・松野航大・須川聡子・熊野宏昭)、2012、日本心理学会第 76 回大会。査読有

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
特になし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井合真海子 (IGO MAMIKO)

早稲田大学人間科学学術院 助手

研究者番号：40613865

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：